

審査の結果の要旨

氏名 加藤 星花

本研究は、欧州に在住し日本人学校にかよう青年の精神状態を把握し、都内の公立学校にかよう青年と比較を行い、また、彼らの精神および行動問題と、コーピング、他の文化変容的ストレスとの関連を明らかにするため、チューリッヒ（スイス）、ウィーン（オーストリア）、ロッテルダム（オランダ）、ブカレスト（ルーマニア）、ワルシャワ（ポーランド）、プラハ（チェコ）の6つの日本人学校の青年（以下、欧州グループ）と、都内の公立中学校1校と、公立小学校2校の青年（以下、日本グループ）に、筆者が既存の尺度で、青年の精神状態を測定する Youth Self Report（以下 YSR）、コーピング尺度、生活満足度などをもとに作成した質問紙調査の実施を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 小学生と中学生に分けて、性別ごとに欧州グループと日本グループ間で YSR、コーピング尺度、生活満足度得点を比較した結果、小学生男子では、コーピング尺度の回避型コーピングおよび生活満足度が、欧州グループの男子が日本グループよりも高い得点であった。小学生女子では両グループ間で有意な差は認められなかった。中学生では女子の YSR 身体的症状、注意/社会性の問題、非行的行動、コーピング尺度の問題焦点型コーピングの得点に差が認められ、日本グループの方の得点が高かったことから、欧州に住む青年のほうか問題が少ないことが示された。
2. 欧州グループの男女ごとに、過去の海外生活経験の有無でグループ分けをして YSR 得点を比較した結果、男女共有意差は認められなかった。
3. 現在の海外滞在期間を1年以上とそれ以下の期間で2つに分けて YSR 得点を比較した結果、男子では、注意/社会性の問題において滞在が1年以下の方の得点が高く、精神行動問題が多いことが示された。一方で女子では、

YSR 総得点、内向尺度、外向尺度、不安/抑うつ、注意/社会性の問題、非行的行動において、1年以上滞在している女子の得点が高く、精神行動問題の多さが示された。

4. 現地語と日本語に関するコミュニケーション能力を検討した結果、女子の方が男子よりも聞き取り、会話、書き取りにおいて問題を感じている者が多かった。現地語と日本語の能力によって、男女ごとに4群に分けてYSRを比較した結果、男子では非行的行動において、両方の言語に問題を感じている群がもっとも得点が高かった。女子では、外向尺度、注意/社会性の問題において、両方の言語に問題を感じている群がもっとも得点が高かった。日本語のコミュニケーション問題の有無により、男女ごとに2群にわけて、YSRを比較した結果、男子では有意差は認められなかったが、女子において、外向尺度、注意/社会性の問題で、日本語に問題を感じている女子の得点が高く、問題の多さが示された。
5. 欧州グループ内にて、精神状態に問題が認められる群と、問題の無い群の間でコーピング尺度、生活満足度、日本への帰国後の不安得点を比較した結果、問題のある群の方が、回避型コーピングの使用が多く、生活満足度の得点が低く帰国後の不安が高かった。
6. 欧州に住む青年の精神保健に関連する要因は、言語能力、回避型コーピング、生活満足度であった。

以上、本論文は欧州に住む青年の精神保健において、日本の青年よりも問題が少ないことを明らかにした。また、本研究は、欧州に住む青年の文化変容ストレスの影響を解明し、彼ら自身のコーピング能力へのサポートを図ることで、海外在住中だけではなく帰国してからも、彼らの生活を充実させるために重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。